ツバキ栽培 小原謹治さん（南条）

洋種ツバキに魅せられて24年。南条のツバキ博士

▲ツバキ温室の中で、ツバキの美しさについて話す小原謹治さん

市の木であるツバキにも、たくさんの園芸品種があります。見たこともないような大輪の花が咲く洋種ツバキのほか、珍しい黄色の花が咲くツバキや香りのするツバキなど、市内南条の小原謹治さんのツバキ温室を訪ねると、その種類の多さにあらためて驚いてしまいます。小原さんは、これらのツバキを輸入し育てたり、自ら新しい品種を作り出しているツバキ博士です。

小原謹治さんは、毎年恒例になっている館山市平砂浦にある千葉県南房パラダイスでの「早春・椿展」に、毎回丹精こめた作品を出品してきました。

ツバキ研究の第一人者である小原さんがツバキに関わったのは、ツバキが館山市の木に指定された頃、中学の同期生に勧められて仲間6人で始めたのがきっかけでした。

「始めたのはいいけれど、最初は全部枯らしてしまいましてね。それが悔しくて今度こそはと思い、やっているうちに深追いしたというか…、深みにはまったというか…。埼玉の安行（あんぎょう）に植物の専門家がおりまして、接ぎ木の

◀小原さんが手塩にかけて育てているツバキたち

▲小原さんは、毎日ツバキ温室を見て回ります

▲この大輪の花を見ると、「これがツバキ？」と、みんな驚いてしまいます

▲小原家の池のほとりに咲くツバキ「ボクハン」

方法を教わりに1年程通いましたね。ツバキの外国品種を継続的にやる人がいないということもあり、じゃあ、自分がやろうということで今日まできたということなんですが、今、ツバキをやっているのは、私ひとりになってしまいました」

ツバキと関わって24年。小原さんは洋種が専門でこれまでに手がけた数は700種以上にも及びます。ハウスの中には最近まで5、000本もの鉢植えがありました。また、市が毎年小学校の新入学児童に贈っているツバキの記念樹も、小原さんが手塩にかけて育てたものです。日本で毎年、外国品種の苗を輸入しているのは小原さんぐらいしかいません。10㌢ほどの苗に2～3本のまだのびきらない芽が出ているものを輸入し、その新芽を挿し木します。洋種は一般に大輪が多く、咲くとそれはたいへん見事なものです。

「輸入苗を選ぶのも難しくてね。ニュージーランドとアメリカから苗の本が送られてくるんですが、全て英語ですから訳すのから始めます。たくさんの新品種の中から選ぶんですが、実際咲いてみないとわからないし、選んだものが日本で人気が出るとは限らない。だから評判がいいと嬉しいですよ」

日本原産のツバキはジャポニカと呼ばれ、日本で作出されたり発見された品種を日本種、日本から海外に渡ったツバキをもとに、海外で改良作出された品種が再び日本に輸入されたものを洋種と呼んでいます。ツバキは藪ツバキを筆頭に何千種もの園芸品種が栽培され、中国、朝鮮半島の南部海岸地帯、東南アジアを含めた照葉樹林地帯には数多くのツバキの仲間が自生しているそうです。

小原さんが作出し名付けたツバキも10種類ほどあります。その中で小原さん自身の名前の付いた「K・OHARA」は、93年10月にアメリカ南カリフォルニアのツバキ協会が出している雑誌、「カメリア レビュー」の表紙となって紹介されました。

「あれは蒔いた種の中からできたものです。知人にあげたりして自分の手元にはあまり残っていないんですよ。名古屋では人気が出ましたね」

親と同じ花を咲かせるには挿し木、接ぎ木でないと咲きません。種では交配されているから、違ったツバキができるのだそうです。そこがまた面白いところなのかもしれません。

ツバキの花は、白、赤、ピンク系が多いのですが、黄色の花が咲く金花茶（きんかちゃ）というめずらしいツバキもあります。また、ほとんどのツバキには香りはありませんが、ルッチェンシス、スプリング・ミストなどわずかですが香りのするツバキもあるということです。

藪ツバキや垣根に咲くツバキなら見慣れていますが、小原さんのツバキ温室で咲くツバキに出会ったら、誰もが「わあっー」っと、歓声をあげて驚くに違いありません。バラのような牡丹のような大輪のツバキに出会うことができます。

「ツバキにはツバキ自身が見せたい時というのがあって、それを見られるのが嬉しいですね。外国品種は大輪が多く、咲き始めてから咲き終わるまでの変化の美しさも、何とも言えないほどいいですね。その美しさを写真に撮りたいとカメラにも凝り何台も買いました。そのままの色を写してやりたいと思っても、写真では本当の花の色を出すのは難しいですね」

残念ながら体調をくずしたため、今年で「早春・椿展」への出品は最後にしようと思っている小原さんですが、ツバキへの思いは深く今年も接ぎ木用の台木を300本注文し、その後また300本追加してしまったそうです。体調がいいときは朝から夕方まで接ぎ木に精を出し、夜になると苗木たちの様子を見るのが小原さんの日課になっています。ツバキたちもきっと小原さんが顔を出してくれるのを楽しみにしているはずです。

▲ツバキの専門誌「カメリア レビュー」の表紙を飾った「K・OHARA」